

援助行動における認知条件に関する研究(Ⅰ)

A Study of Cognitive Conditions in Helping Behavior (1)

高 尾 正

問 題

向社会性の研究における課題の一つに、向社会性（愛他心）と向社会的行動（愛他行動）間のメカニズムの解明がある。向社会性が持続性を持つ一貫した特性であるかどうかの問題から、その向社会性が援助を必要とする個々の場面において、どのように行動として発現するのかの問題に到るまで多くの究明を必要としている。向社会性が実際に行動として発現するのはきわめて限られた条件のもとであり、その条件によって向社会的な行動は促進されたり、抑制されたりする。また我々は、向社会的な行動（たとえば、困っている相手を助けてあげることや、仲間に協力することなど）は、それが望ましい行動であり、社会生活を営む以上そのようにすべきであることは理解している。しかし、こうした理解もまた直接、向社会的行動の発現に結びつくわけではない。

いま向社会的行動の一つとして援助行動を取りあげてみよう。援助が行動として発現されるためには、まずその人自身の向社会性が基礎となることは言うまでもない。向社会性は、その人の内部に内在化した個人的な規準を作りあげているものと思われる。この規準にはレベルと個人的な特殊性が含まれている。レベルとは、規準の高さで、たとえば、他の人から援助をうければ、絶対に返さなければいけないと考える人々もあろうし、またそれほど厳密に考えない人々もいるであろう。個人的な特殊性の中にも種々の要因が含まれているが、たとえば、電車の中で老人に席を譲ることは社会的に望ましい行動として共通理解を得られているが、しかし、幼い子どもの場合には、譲るべきであるとの規準を持つ人々もあれば、譲るべきではないとの規準を持つ人々も存在するであろう。

さらに援助行動が喚起されるためには、場面の手がかりから生じる、被援助者に対する認知と共感、援助者の現実認知が必要である。被援助者に対する認知と共感とは、いま（その場面において）、その人が援助を必要としているか、また必要としておればどのような種類の援助を必要としているかという認識であり、さらに、その人やその人の置かれた状況

に対する好意的な情緒反応が共感である。さきの向社会的な規準との関連で述べるならば、幼い子どもには席を譲るべきではないとの規準を持っていたとしても、その子どもがたいへん疲れているようでかわいそうに思え席を譲ることはありえよう。援助者の現実認知とは、たとえば、席を譲るにあたって、自分がどれ程疲れているか、どれくらいの時間乗らねばならないかなどである。このような場面の特殊性が、個人の内部に積み重ねられ、それらの特殊な状況での行動が一般化されることにより、さらにその人の内部規準が形成され修正されていくものと思われる。

そこで本研究では、場面の特殊性が援助行動の認知にどのようにかわるのか、またそれら各場面をとおして、共通な個人の援助傾向（向社会性）が存在するのかを明らかにしようとする。援助に伴うコストの異なる6種類、各々のストーリーの結果が成功、失敗の2条件、合計12通りの援助場面を想定し、まずはじめに、成功条件と失敗条件によって援助遂行の態度評定がどのように変化するのを検討する。次に、自分がそのような行動をうまくとれるのかを自己効力として、態度評定との関連について考察する。さらに、援助遂行の理由を分析し、援助行動に到る認知の違いについての検討を行う。そして、これらと援助場面とのかかわりの分析をすすめることを目的とする。

方 法

1. 援助行動モデルの評価

援助に伴うコストの大きさを基準にして、援助行動の6場面を作成した。さらにこのモデルそれぞれについて、結末を成功条件にした、ポジティブモデルと、失敗条件にした、ネガティブモデルのバリエーションを設定した。それぞれの、モデルは次のとおりである。

- (1) Aさんは、交差点にとびだした子供を見つけ、間に合わないなと思いながらも、とっさに子どもを助けようとして道路に走り込みました。あぶないところで2人ともケガもなく助かり、周りの人たちが拍手でむかえました。
(2人ともトラックに跳ねられて大ケガをしてしまいました。)
- (2) Fさんの妹(家族)は、重い腎臓(じんぞう)病です。移植手術をすれば、ごくわずかではあるが助かる可能性がある、と言われました。Fさんは迷いましたが、自分の腎臓の1つを提供しました。妹(家族)は全快し2人で旅行に行く事が出来るまでになりました。
(しかし、やはり妹(家族)は、助かりませんでした。)
- (3) Dさんは、大事な試験の前日、友だちから仕事を手伝ってほしいと頼まれました。試験勉強が出来ていないから、困ったな、と思いながらも手伝ってあげました。友達は喜ん

でくれましたし、試験も無事パスしました。

(しかし、やはり試験には失敗してしまいました。)

- (4) Bさんは、電車の中で女の人が、酔っぱらいにからまれていた時、こわいな、と思いな
がらもその人の代わりに大声で、やめなさいよ！ と言いました。酔っぱらいは、Bさ
んの声を聞くとコソコソと逃げ出し、車内の人たちは歓声をあげました。

(ところが酔っぱらいは、Bさんにもからんできたため、その女の人と2人とも散々な
目にあいました。)

- (5) Eさんが電車に乗り遅れそうになって必死に走っている時、小さな女の子が目の前で
転びました。どうしようかと迷いましたが、助け起こして泥をはらってあげました。女
の子は、泣き止んでニコリと微笑み、Eさんは嬉しくなりました。

(その時、母親がやってきて、よけいなことをしないでくださいといわれました。)

- (6) Cさんが、夜遅く疲れて電車の中で座席に座っていると、六十歳ぐらいの女の人が乗っ
てきました。席を代わってあげるには少し若いかな、とも思いましたが、思いきって声
をかけました。すると、その女の人はいへん喜んで、何度もお礼を言って座りまし
た。

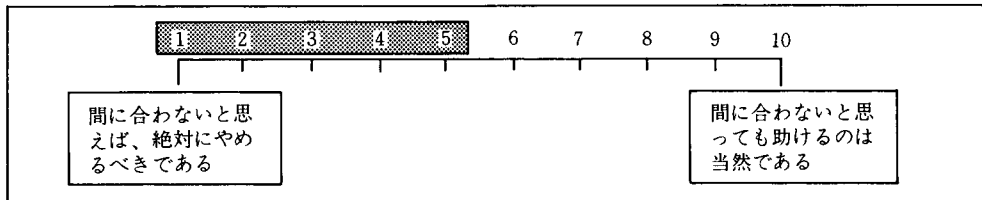
(その女の人私は、そんな歳じゃありません、と言って怒り出しました。)

() 内はネガティブ・モデル

例話(1)(2)は援助に伴う高コスト場面、(3)(4)は中コスト場面、(5)(6)は低コスト場面である。
このコスト×場面の6通り、12例話について、

- (A) AさんからFさんまで6人の援助行動に対する、肯定一否定の態度評定
(B) このような援助行動についての自己の遂行可能性の予測・自己効力評定(あなた
なら、このような行動はどの程度できると思いますか)
(C) AさんからFさんまで6人が、援助行動にコストが伴うにもかかわらず、このよ
うな行動を遂行した理由

の3点について評価、記述を求めた。(A)(B)については、1～10までのスケールのいずれか
1点に評定させた。



例：モデルⅠ(1)

この10段階評価は、その援助行動が、(A)肯定できる・肯定できない、(B)遂行できる・遂

行できない、の態度を確定した後、その程度を評定させるものである。そのため、中間点（どちらとも言えない）を排し、さらに強調のため、1～5（否定）の数字に網目をかけ、肯定・否定を決定した後、段階評価するように教示を与えた。

(C)については、援助行動の理由を1点のみ自由記述するように求めた。なお、例話中のAさんからFさんについては、同性（従って、本発表の場合は女性）を想定するよう教示を与えた。

2. 実施

被験者は、女子大学生を、ポジティブモデル（成功条件）群とネガティブモデル（失敗条件）群に分け、それぞれ独立して実施した。記入不備な者を除き、ポジティブモデル群133名、ネガティブモデル群129名を分析に用いた。

結果と考察

Table 1 援助行動モデルにおける態度・自己効力

場面	コスト		成功条件		失敗条件	
			M	SD	M	SD
(1)	H	態度評定	6.83	1.52	5.53	2.13
		自己効力	4.59	1.90	3.44	1.99
(2)	H	態度評定	8.45	1.57	8.35	2.02
		自己効力	7.61	2.26	7.60	2.53
(3)	M	態度評定	5.30	2.25	3.48	2.30
		自己効力	4.71	2.26	4.15	2.47
(4)	M	態度評定	6.80	1.63	6.11	2.29
		自己効力	4.47	2.06	4.35	2.34
(5)	L	態度評定	8.02	1.75	7.23	2.57
		自己効力	7.41	2.03	6.94	2.30
(6)	L	態度評定	8.20	1.79	6.12	2.60
		自己効力	6.90	2.17	5.67	2.38

援助行動に対する態度の評定と、遂行可能性の予測・自己効力評定の結果はTable 1に示した。分散分析の結果、(A)成功－失敗条件の主効果（ $F=12.27$ $df=1,3120$ $P<.01$ ）、(B)態度評定－効力評定の主効果（ $F=189.85$ $df=1,3120$ $P<.01$ ）、(C)援助行動モデルの主効果（ $F=223.80$ $df=5,3120$ $P<.01$ ）、さらに((A)×(B)、(A)×(C)、(B)×(C))の一次交互作用（ $F=11.76$ $df=1,3120$ $P<.01$ ； $F=10.93$ $df=5,3120$ $P<.01$ ； $F=22.15$ $df=5,3120$ $P<.01$ ）にも1%水準の有意差が認められたが、二次交互作用（ $F=1.67$ $df=5,3120$ $P>.05$ ）に有意差は検出されなかった。

これらから、主効果について述べるならば、成功条件における被験者は、失敗条件における被験者よりも両評定とも高い評価を与えており、援助行動の促進と抑制における認知機能の関与を証明するものである。すなわち、同じ条件における結果の相異が、行動の規準に差をもたらしていることから、人間は、援助行動そのものの価値判断をするのではなく、行動の結果をも含めて、援助行動の価値判断をしていると言えよう。ここに場面として用いられた援助行動はすべて社会的に望ま

しい行動と考えられる。そのため、この規準の認知には、社会的望ましさによる影響を完全に排除することは困難であろう。しかし、成功・失敗の結果によって、援助行動それ自体の社会的な望ましさの基準に変化はほとんど認められないであろうから、これらの評定の差は、行動の結果から導き出された認知の差であると考えられる。

Table 2 態度評定と自己効力の相関

	成功条件	失敗条件
場面	γ	γ
(1)	.317*	.273*
(2)	.829*	.800*
(3)	.767*	.703*
(4)	.703*	.590*
(5)	.806*	.749*
(6)	.698*	.633*

* $P < .01$

この成功条件と失敗条件の統計上の差は、肯定一否定の態度評定と自己効力を含むものである。Table 2 に態度評定と自己効力の相関を示した。(1)～(6)までの全ての場面に有意な相関が認められたが、特に場面(1)交差点を除く5場面では非常に高い相関が検出され、両評価が密接に関連することを明らかにしている。また、(1)交差点の場面においては、遂行の困難さが、他の場面とくらべ相関の高くならなかった理由であると推測される。しかし、両者を比較して単純効果の検討をしてみると、態度評定と自己効力とではいくつかの相異が認められる。さきに述べたように、態度評定と自己効力の主効果間には、有意差が検出され、態度にくらべ自己の遂行可能性予測の値は常に低くなってあらわれている。さらに態度評定において、平均値が5点以下(否定)となったのは、場面(3)友人の手助けの失敗状況($M=3.48$)のみであるが、効力評定では、成功条件、失敗条件を含め半数が「できないであろう」との予測を行なっている。そして、態度評定における成功条件と失敗条件の差は、自己効力におけるそれよりも大きいものが多く、有意差の認められた援助行動場面も、態度評定の、(1)交差点、(3)友人の手助け、(5)ころんだ女の子、(6)座席を譲る、の4場面であるのに対し、効力評定では、(1)交差点、(6)座席を譲る、の2場面のみである。これらから、援助行動の成功・失敗という結果は、態度と効力の両評定に影響を与えるものの、それは、自己の援助行動遂行の程度よりは、援助行動それ自体の価値判断により大きな影響を与えるといえよう。

さらに、これらは援助行動の場面とのかかわりにおいて分析する必要がある。援助行動の場面の主効果については、さきに述べたとおり有意な差が認められている。また、成功一失敗条件、態度一効力評定ともその数値は援助の場面によって大きく変るが、同時に一定の傾向も認めることができる。すなわち、(2)腎臓病、(5)ころんだ女の子、(6)座席を譲る、の3場面は、前述の4条件とも高い値を示し、(1)交差点、(4)電車内の酔っぱらい、(3)友人の手助け、の3場面は比較的低い値を示している。場面による相異が4条件の場合とも、比較的似たような傾向を示しているということは、援助の場面によって、援助行動に対する態度が変化することを意味し、これが援助行動を考察するうえで重要な要因であると思われる。

援助行動の基礎となる向社会性について、それが一貫性と持続性を持った比較的安定し

た傾性であるかについて常に論議が行なわれてきた。Burton, R. V. (1963) は、この点に関して、向社会性と結びつく「正直さ」という傾性の一貫性を否定した Hartshorne, H. らの研究を因子分析法により再検討した結果、正直さの傾性は、場面に特有である部分と、

(2)	・ 590*				
	・ 290*				
(3)	・ 147	・ 414*			
	・ 194**	・ 047*			
(4)	・ 161	・ 307*	・ 196**		
	・ 195**	・ 079	・ 069		
(5)	・ 160	・ 392*	・ 309*	・ 168	
	・ 349*	・ 145	・ 319*	・ 258*	
(6)	・ 262*	・ 578*	・ 273*	・ 184**	・ 170
	・ 207**	・ 152	・ 257*	・ 030	・ 266*
場面	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)

Table 3 態度評定の場面相関

(上段成功条件：下段失敗条件)

(2)	・ 581*				
	・ 242*				
(3)	— 006	・ 187**			
	・ 199**	・ 114			
(4)	・ 335*	・ 236*	・ 168		
	・ 270*	・ 128	・ 039		
(5)	・ 167	・ 316*	・ 243*	・ 124	
	・ 348*	・ 160	・ 244*	・ 236*	
(6)	・ 311*	・ 336*	・ 241*	・ 228*	・ 163
	・ 336*	・ 258*	・ 194**	・ 117	・ 256*
場面	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)

Table 4 自己効力の場面相関

(上段成功条件：下段失敗条件)

それ以外に共通基底部分が存在すると結論づけている。向社会性の一貫性を相関によって立証しようとした研究では、Yarrow, M. R. ら(1976) の報告のように必ずしも意味のある差の認められていないものもあるけれど、一貫性を証明した研究もいくつか報告されている(Rutherford, E. & Mussen, D. 1968, Rubin, K. H. & Schneider, F. W. (1973)。また、さきに社会的な望ましさの問題について述べたが、この点に関連して、Mussen, P. & Eisenberg-Berg, N. (1977) は、Bem, D. J. ら(1974) の研究を引用して、愛他心が個人によって非常に大切な人格特性であると考えている子どもは、愛他心が問題となるような場面では一貫した行動を示し、そのようには思っていない子どもの場合は、場面によって行動をかえると述べている(Mussen *et al* 1977, p. 28) このように、向社会性の一貫性に関しては、現在のところ必ずしも結論が出されているわけではないが、向社会的行動や向社会性に関連するパーソナリティ指標間に有意な相関を見出した報告が数多く発表されるようになってきたといえよう。

そこで、本研究の結果を、場面による援助行動の変化と一貫性の関連で考察してみたい。Table 3, 4 は、態度評定と自己効力の場面間の相関を示したものである。態度評定、自己効力のいずれの場合も、また成功条件、失敗条件のいずれの場合も各場面間に相当数の、非常に高い数値ではないが、有意な相関が認められた。これは、援助行動の内的な規準に一貫性が認められるものであるし、また、援助行動の自己の遂行の可能性予測に一貫性を認めるものである。援助行動を望ましく思う人は場面をこえて同じような傾向を示すであろうし、ある場面において援助できると考えた人は、他の場面においても援助遂行の可能

性が高いといえよう。すなわち、援助行動に対する態度については場面を越えて基本的な傾向が存在するように思える。しかし、この一般的傾性を認めただけで、場面による援助行動の相異について分析をすすめる必要がある。さきに述べたように、援助行動に対する態度評定、自己効力は場面によって大きな差異を示している。さきの有意な相関との関連で考察すれば、それは、援助行動の場面によってパラレル様に値を変化させているということである。(1)交差点 から、(6)座席を譲る、までの6場面毎の数値の変化は、被験者によるパターンの変動が少なく、従って、各場面の援助行動の認知が多くの被験者で類似したものであると考えられる。ある場面において相対的に高い評定値を与えた被験者は、他の場面においても相対的に高い評定値を与えているし、低い評定値を与えている被験者の場合も同様である。しかし、各場面毎による評定の絶対値には大きな差異が認められているわけである。この相対的な同一性が、向社会的傾向の一貫性であり、この絶対的な差異が、援助行動の認知機能を証明するものであろう。すなわち、向社会性の一貫性とは、必ずしも異なる場面での絶対的なレベルでの愛他行動の発現(評価)を意味するものではなく、個人の内的な向社会性の基本的傾向に、愛他行動を喚起(抑制)する認知の働きによる場面特有のレベルを含むものであろう。このような結果は、前述の Burton, R. V. の場面に特有の反応と一般的な傾性が存在するという分析結果と一致するものである。

このような結果に基づいて、ふたたび、援助の場面による態度評定、自己効力の結果について考察したい。まず、援助に伴うコストとの関連については、両評定において高い値を示した、(2)腎臓病、(5)ころんだ女の子、(6)座席を譲る、のうち、(2)は高コスト、(5)、(6)は低コスト群である。援助行動におけるコストの影響は、態度評定と自己効力とでは、必ずしも一致しないであろうと予測される。コストが直接関与するのは自己効力であり、コストが高くなれば自己効力は低下すると思われる。事実、低コスト場面(5)、(6)では自己効力が高くなっている。しかし、大きい犠牲を伴うであろう(2)の場面での自己効力は最高値を示している。これは、コストは自己効力に全く無関係ではないが、「家族のため」のような場面状況がより重要な要因となることを示しているものとも考えられる。次に、態度評定とコストとの関連は、必ずしも自己効力の場合のようには一義的な予測は困難である。コストが高くなれば、社会的規準からすれば予測される犠牲が大きくなるぶんだけ社会的な評価は上昇すると考えられるため、態度評定も上昇すると予測されるし、また、個人的規準からすれば、支払う犠牲が大きくなれば否定的態度が増加するとも考えられる。結果は、効力評定の場合と全く同じパターンを示し、必ずしも明確な結論を導き出せるものではなかった。

そこで、態度評定においては、その性質上、コストよりは、援助行動の結果が、自己効力の場合よりもより重要な要因ではないかと推測される。この点に関しては、成功一失敗条件による両評定間に有意な差が認められていたが、態度評定と自己効力における、条件

間の差を比較してみると、6場面すべてにおいて、態度評定での差が自己効力の場合よりも大きく、仮説は検証された。

Table 5 態度評定と自己効力の否定・肯定評価の人数

場面		成功条件		失敗条件	
		否定	肯定	否定	肯定
		N	N	N	N
(1)	態度評定	22	111	55	74 ^{abc}
	自己効力	87	46	105	24
(2)	態度評定	6	127	13	116 ^b
	自己効力	19	114	23	106
(3)	態度評定	68	65	102	27 ^{ac'}
	自己効力	75	58	88	41
(4)	態度評定	30	103	47	82 ^b
	自己効力	89	44	89	40
(5)	態度評定	11	122	25	104 ^{a'}
	自己効力	21	112	27	102
(6)	態度評定	10	123	50	79 ^{abc'}
	自己効力	29	104	60	69

a 条件間 $P < .01$ b 評定間 $P < .01$ c 交互作用 $P < .01$

a' 条件間 $P < .05$ b' 評定間 $P < .05$ c' 交互作用 $P < .05$

さらに、援助の場面におけるいくつかの特徴的な結果について考察したい。まず、(2)腎臓病、についてであるが、この項目は、成功、失敗の条件による差が、態度評定、自己効力の場合とも最も小さい。同じ高いコストを伴う場面である、(1)交差点、の場合が成功、失敗の条件によって態度評定、自己効力とも変化しているのとは異なる結果を示している。また、(1)交差点は、(4)電車内の酔っぱらい、と共に、態度評定と自己効力の差の大きい項目である。すなわち、社会的に見て望ましい行動ではあるが、実行しにくい行動であるとの判断がなされている場合であるといえよう。

(4)電車内の酔っぱらい、と(6)座席を譲る、は共に電車内という公衆の目に大きくさらされる行動ではあるが、成功一失敗の状況による両行動の差異が明らかである。(6)では、成功一失敗という結果によって態度評定、自己効力とも大きく変化するが、(4)では、その差はわずかである。これは、(4)の場面における援助の必要度についての認識が大きいからであると思われる。

(3)友人の手助けは、態度評定の最も低い項目であり、成功一失敗条件による差の大きい項目でもある。また、自己効力においては、その数値が低いものの、態度評定よりは、自己効力の数値が高い(失敗条件)唯一の場面である。これは、この項目が、援助の社会的な望ましきや必要度の観点からみれば非常に低いけれども、手助けの実行という点に関しては相対的に寛大な項目であるからだと思われる。

さらに、態度と自己効力の評定の否定(1~4点)と肯定(5~10点)の人数の比率から考察をすすめた(Table 5 参照)。結果は、これまでの分析を確認するものである。情報分析の結果、交差点($\chi^2=23.384$ df=1 $P < .01$), (3)友人の手助け($\chi^2=31.397$ df=1 $P < .01$), (5)ころんだ女の子($\chi^2=6.471$ df=1 $P < .05$), (6)座席を譲る($\chi^2=51.896$ df=1 $P < .01$)の4場面で、成功条件と失敗条件間に有意な差が認められ、(1)交差点($\chi^2=104$ ・

Table 6 援助行動遂行の理由

場面	理 由	成功条件	失敗条件
(1)	ポジティブ・パーソナリティ（親切なる人・勇気ある人）	20 (15.0)	21 (16.3)
	互恵（自分や子どもが以前に助けられた）	2 (1.5)	5 (3.9)
	社会的責任（命を助けるのは当然である）	40 (30.1)	27 (21.0)
	反射（考える間もなく体が動いた）	26 (19.5)	32 (24.8)
	社会的圧力（助けなければ、人目がある）	12 (9.0)	15 (11.6)
	合理化（間に合うと思った）	22 (16.5)	18 (14.0)
	その他	11 (8.3)	11 (8.6)
(2)	選択(1)（妹だから、家族だから）	77 (57.9)	51 (39.6)**
	選択(2)（好きな妹だから）	11 (8.3)	11 (8.6)
	自己犠牲（自分を犠牲にしても助けてあげたい）	12 (9.0)	12 (9.3)
	合理化（助かるという可能性を信じたから）	16 (12.0)	37 (28.0)
	社会的責任（2つあるものであれば1つあげてもかまわない）	5 (3.8)	6 (4.7)
	その他	12 (9.0)	12 (9.3)
(3)	社会的責任（困った時助けてあげるのは当然である）	39 (29.3)	36 (27.9)*
	選択（特に親しい友人だから）	36 (21.8)	16 (12.4)
	互恵（以前に助けてもらった。困れば助けてほしい）	16 (16.0)	10 (7.8)
	消極的援助（うまれたくない。友人をなくしたくない）	11 (18.3)	21 (16.3)
	ネガティブ・パーソナリティ（ことわりきれない性格・気弱な性格）	23 (17.3)	39 (30.3)
	その他	8 (11.2)	7 (5.5)
(4)	ポジティブ・パーソナリティ（正義感の強い人）	25 (18.7)	23 (17.9)
	互恵（以前助けられた、同じ目に合えば助けてほしい）	52 (39.0)	51 (39.6)
	被害者に対する同情	23 (17.2)	27 (20.9)
	加害者に対する反発	20 (15.0)	15 (11.7)
	自分に被害が及ぶのをさける	1 (0.8)	6 (4.7)
	その他	12 (9.0)	7 (5.4)
(5)	ポジティブ・パーソナリティ（子ども好きのやさしい性格）	38 (28.5)	36 (27.9)
	社会的責任（起こしてやるぐらいは当然である）	22 (16.5)	21 (16.3)
	社会的圧力（知らん顔すると人目がある）	30 (22.6)	26 (20.2)
	同情（ほおっておくとかわいそうだから）	31 (23.3)	35 (27.1)
	その他	12 (9.0)	11 (8.5)
(6)	ポジティブ・パーソナリティ（やさしい・思いやりのある人）	15 (11.2)	13 (10.1)
	互恵（自分が年寄りになれば席を代ってほしい）	7 (5.2)	10 (7.8)
	合理化（年寄りで、疲れているようにみえた）	57 (42.8)	49 (38.0)
	社会的責任（老人に席を代るのは当然である）	29 (21.8)	29 (22.5)
	社会的圧力（席を代らないと廻りの人の目があるから）	15 (11.2)	15 (11.7)
	その他	10 (7.5)	13 (10.1)

() 内パーセント * P < .01 ** P < .05

570 $df=1$ $P<0.01$), (2)腎臓病($\chi^2=10.035$ $df=1$ $P<0.01$), (4)電車内の酔っぱらい($\chi^2=79.995$ $df=1$ $P<0.01$), (6)座席を譲る($\chi^2=7.928$ $df=1$ $P<0.01$)の4場面では、態度評価と自己効力の間に有意差が検出された。最初に述べたように、本研究の10段階評価では中間点を設けず、否定と肯定の評価を鮮明にするように計画をすすめた。そのため、たとえば、5点(否定)と6点(肯定)では単に1点の差ではなく、それ以上の意味が存在すると思われる。そのためにこのような分析を用いたわけであるが、結果は、これまでの考察を確認するものであった。

次に、援助行動に関する否定、肯定の態度評価を、その援助行動が遂行に到った理を推測させることにより分析しようと試みた。援助行動を規定する要因として高野清純(1982)は、共感と認知機能を挙げ、認知機能の重要々因として、社会的責任、公正、互惠の規準を認定している。このようなカテゴリーに大枠として準拠しながら、援助行動に到る自由記述による動機をいくつかのカテゴリーにまとめたものがTable 6である。(1)交差点では、社会的な責任や反射を理由に挙げる者が多く、成功状況と失敗状況の間に有意な差は認められない。(2)腎臓病の場面は、家族(妹)だからとする理由づけが高い比率をしめ、被援助者側に援助行動の決定を準拠させ、他の場面のようには、援助者側の規準を行動決定の理由づけする割り合いが少ない。また、(2)の場面は、成功-失敗条件によって推測に有意差の見られた項目である。($\chi^2=13.906$ $df=5$ $P<0.05$)すなわち、失敗条件では、助かるという可能性を信じたからとする行動の合理化が、成功条件よりも多く、これは、失敗という結果を合理化によってうめあわせしようとする心理機制によるものかもしれない。

(3)友人の手助けの場面も、成功-失敗条件による差異の検出された項目である($\chi^2=16.773$ $df=5$ $P<0.01$)。失敗条件では、うらまれたくない、友人を失いたくないとする消極的援助、ことわれない気弱な性格のために援助するはめになったとするネガティブパーソナリティの要因が、成功条件により多くなっている。失敗条件ではやはり、援助行動を消極的な動機によるものと認知することによってその行動を正当化しているかもしれない。(4)電車内の酔っぱらいの場面では、互惠の規準が半数を越え、女性としてこの問題が人ごととしてとらえられない状況を表わしている。統計上の差は認められないが、失敗条件では、自分に被害が及ぶのを避けるためにためが6人(4.7パーセント)あり、自分に被害が及んだ(失敗条件)ことで、消極的な理由づけを推測しているものと思われる。

(5)ころんだ女の子の場面は、成功-失敗の条件による差異の非常に小さい項目である。動機の推測は4つに分散されており、うち、知らん顔すると人目があるからという消極的な理由によるものが約20パーセントあり、これも両条件による差はほとんど認められない。(6)座席を譲るの場面では、年寄りで疲れているように見えたからとする合理化による理由づけが最も多い。さらに廻りの人達の目があるからとする社会的圧力の要因も合理化の理由の場合と同様成功-失敗の条件による差はほとんど認められない。

以上援助行動遂行動機の推測について概括してまた、結果は必ずしも明確なものではなかった。成功一失敗の条件による差異も、2つの場面で認められ、失敗場面での合理化による結果の修正や、消極的援助の理由づけが多くなる傾向が存在したものの、それは他の援助場面では明らかになっていない。

参 考 文 献

- Bem, D. J. & Allen, A. On predicting some of the people some of the time, *Psychological Review*, **81**, 1974, 506-520.
- Burton, R. V. Generality of honesty reconsidered, *Psychological Review*, **70**, 1963, 481-499.
- Combs, D. L., Avila, D. L. & Purkey, W. W. *Helping relationships*, Allyn & Bacon, Inc., 1978, (大沢博, 菅原由美子訳『援助関係』ブレーン出版, 1985)
- Mussen, P. & Eisenberg, N. *Roots of caring, sharing and helping*, W. H. Freeman and Co., 1977. (菊池章訳『思いやりの発達心理学』金子書房, 1980)
- 中村陽吉『対人関係の心理, 攻撃か援助か』大日本図書, 1976.
- Rubin, K. H. and Schneider, F. W. The relationship between moral judgment, egocentrism, and altruistic behavior, *Child Development*, **44**, 1973, 661-665.
- Rutherford, E. & Mussen, P. Generosity in nursery school boys, *Child Development*, **39**, 1968, 755-765.
- 祐宗宗三, 原野広太郎, 相木恵子, 春木豊(編)『社会的学習理論の新展開』金子書房, 1985.
- Staub, E., Bar-Tal, D., Karylowski, J. & Reykowski, J. (ed) *Development and maintenance of prosocial behavior*, Plenum Press, 1984.
- 高野清純『愛他心の発達心理学』有斐閣, 1982.
- 竹綱誠一郎, 鎌倉雅彦, 沢崎俊之「自己効力に関する研究の動向と問題」『教育心理学研究』**36**, 2, 77-89, 1988.
- Yarrow, M. R. & Waxler, c. 2. Dimensions and correlates of prosocial behavior in young children, *Child Development*, **47**, 1976, 118-125.